

読者のまなざし

白木が作品に軽がていく



青柳菜摘

1990 年東京都生まれ。映像メディアを用いた同時代芸術のアーティストとして、フィールドワークやリサーチをもとに、プロジェクトベースに主題を立てて作品を発表している。作者自身の経験を表現する方法論として、観察、記録、物語、詩文を手がかりにタイムベースト・メディアの可能性を探究している。2016 年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。近年の活動に個展「亡船記」(十和田市現代美術館, 2022)、「ICC アニュアル 2024 ととても近い遠さ」展(NTT インターコミュニケーション・センター [ICC], 2024)、NMWA 日本委員会主催展覧会「New Worlds」(M5 GALLERY, 2022)、オンラインプロジェクト「TWO PRIVATE ROOMS – 往復朗読」(2020-継続中)、第 10 回 恵比寿映像祭(東京都写真美術館, 2018) など。詩集『そだつのをやめる』(2022) で第 28 回中原中也賞受賞。プラクティショナーコレクティブであるコ本や honkbooks 主宰。「だつお」というアーティスト名でも活動。

「JUMP アーティスト+キュレーター国際協働プログラム」（以下、JUMP）に参加し、視察兼リサーチという形でポルトガルに2週間滞在中の青柳葉摘さんにオンラインインタビューを行った。

2025年5月16日（日本時間 8:00- ポルトガル時間 24:00-）収録

國分：実際にポルトガルへ行って気づいたことはありますか

ヨーロッパの一部なんだけど、海を渡ってきたいろんな文化が入り混じって、どこが発祥か分からないようなところが興味深いです。

食べ物も海鮮類がすごく多いです。スパイスを使ったり、保存のために濃く味付けされたものを調理し直すことも多くて、例えば、タラを干したものなど、日本の出汁のようなものに近いと思うんですけど、おいしいです。日本食が恋しくありませんでした。

國分：青柳さんの制作のエネルギーはどこから来てるのかなって
いうのはずっと気になっていて、ここが青柳さんのやる気の根源
だと思えることがあれば教えていただきたいです。



a-1

日常の延長で作っているとところが大きいです。自分が面白いと思った
感覚を、どういうかたちで相手に伝えられるかを考えた時に、「かたち
にならない」ということが原動力になってる気がしています。

例えばデッサンで絵を描くときには、目の前の対象と自分が向き合っ
た結果を見せるということが紙面上で行われるけど、そもそも現実の世
界にはない、頭の中のイメージを、絵に描くのか、カメラを何かに向け
るのか、言葉にするのか、だれかの体験になるのか……ということ在必
死に考えている感じです。でもきつとそれは（作品制作において）みん
な一緒かもしれないな、というふうに思ってます。

國分：制作の名義はどこがだつおさんでどこが青柳菜摘さんなのかという境界線は明確にあったりするんですか？



b-1

はっきりしてます！

イラストを描くときは「だつお」で、そのほかは「青柳菜摘」っていう。「だつお」として制作を始めた当時は小学生だったので、ネット上に自分の絵をアップロードするときに、ネットリテラシーとして本名を使っちゃいけなくて。そこで生まれた名前なので、自然とイラストや絵を描くっていうことが「だつお」と結びつきました。

でもイラストと絵も自分の中で少しわかれているところがあって、判断はかなり曖昧なんですけれど、ネット上で発表するかどうか、サブカルチャーやインターネットについて考えているか、っていうことかなと。

本名で作品制作をし始めたのは2011年の5月に映像を使った作品を作り始めたときからで、「青柳菜摘」という名前で活動しています。



b-2

國分：根源的に「だつお」という人格を大切にされてる印象があって、「だつお」を出し続けることによって、何かご自身で思われているところがありますか。

元々、「だつお」として活動しているときは本名で作品を作るとは思っていません。小学生の頃からネット上で活動してて、実空間で初めて展示したのは2009年で。「だつお」としての作品は「青柳菜摘」で制作する作品よりも、実験的に見せたい欲求が強いんですけど、それは自分がずっと関心を持ってるネットとかサブカルチャーとかを考える上で大事なのかも。今でももちろん考え続けていることなので、「だつお」を隠すとかも特にはないです。



c-1

國分：2016年にメディア映像専攻を修了されて2025年まで約10年間、修了してからどう変遷していききましたか？ご自身のメディアとの向き合い方がどのように変わったのかお聞きしたいです。

2016年3月に修了してから、コ本やが6月にオープンして、同じ2016年には個展を3回もやっていて、地獄のような状態でした。（笑）

コ本やの立ち上げは（やったことないことばかりで）一番忙しくなった原因ではあるけど、そのおかげでほかのことも頑張らなきゃ、と活力になっていました。

よく、コ本やは自分の作品の一部？と聞かれるのですが、そうではなく、いろんな人が何かを発表したり、来ることで出会いとか、発想したりとか、何かが生まれる場所に仕かっただけなんです。

決まった人だけが出入りするのではなくて、ふらっと立ち寄れる場所にするにはどうしたらいいだろうって。その分、継続していくのはすごく難しい。たとえばそこをアトリエにしちゃったら、どんな人でも立ち寄れる本屋としても成り立たない。「本屋さん」としてそこにいるのが良かったかもしれないですね。

ギャラリーやイベントスペースとしてだけでなく、店舗が併設していると、お客さんの行き来や、イベントを持ち込む人がいたり、近所の方々との関係ができてくる。ただ、これは拠点を構えているひとたちにとって共通の問題点だと思うのですが、物件を借りていると契約が切れたり、移動しなきゃいけないんですよね。そういうアクシデントが起こりまくるってことが、全部自分にとって新しい経験でした。

予期せぬ出来事に巻き込まれて、移り変わっていくこと。移転したり、人が入ったり出ていったり、最初に「こういう場所にしたい」と思って作り始めても、パンデミックが起こったり、何が起こるかわからない。コ本やは自分の作品ではないけど、コ本やを続けていること自体は、自分が予期せぬことを起こしながら制作していきたい、という作り方にも関わっているな、と思います。

國分：詩やコ本や、作品の制作もそうなんですけど、10年後や20年後どのようになつていきたいとか、到達点は何かありますか。

今は自分がいなくても、コ本やはみんなに任せられるようにはなつてるけど、もう少し手から離れていくと、もつといろんな人が関われるようになるんじゃないかなと思つてます。自分は立ち上げた時からずつと考えてることがあつて、それは中高生とか、小学生とか、子どもが遊びに来られる場所にしたいんです。教育の場として先生がいるわけじゃなくて、授業もあるわけでないけれど、遊び場というだけでもなく、なんだかよく分からない場所に自分の意志で行く、というのが子どもにとって当たり前になればいいな、というのを思つてます。

自分の作品制作としては、今は詩に触れたり、現代美術という枠組みだけにとどまらない制作ができてきているので、今後はもつとそれを広げていきたいです。一つの表現形式の中だけにいるんじゃない、違う分野の人たちと知り合つていたり、自分の表現の伸びしろが増えていくことをもつとやっていきたいです。



d-1

ヨハン：映像表現と比較して言葉や詩を扱うことをどのように考えていますか。



e-1

詩を作り始めたのは、ここ5、6年ぐらい。元々、映像を扱う方が作りやすくて、映像の前もずっとイラストとか、ヴィジュアルイメージから作ることが多かったので、それが一番自分にとって自然な作り方でした。

だんだん慣れてくると、撮影してる時に、もうすでに頭の中で編集してイメージが出来上がってしまう。

慣れてしまうと、自分の作り方を崩せないなと思って、もっと崩したらどうかなと思った時に、言葉だけを頭の中で考えようとする、全然うまくできない。

言葉にしようと、イメージを頭に思い浮かべるんだけど、言葉にならない。詩人とか小説家って、どうやって制作してるんだろう？と思って、小説や詩を読んでも、わからない。

それでも無理やり言葉にしてみた時に、今、手で書いている言葉は、頭に浮かんでいるものじゃない、ってことがすごくわかる。それを何回もやっていくと、言葉の意味を頭の中で考えてしまった時に、イメージと意味の乖離が起きているのがわかりました。喋り言葉で考えるのが一番ダメ。喋って意味を伝えようとする時に使う言葉って、みんなで共有している意味を持っているけど、頭の中に浮かんでいるイメージって、そういうものにとらわれないから浮かんでいるっていうのが分かった。

意味にとらわれないように言葉を使うのが詩なのかもって思ったら少しずつ書けるようになって、まだ今も実験中だけど、少しずつわかってきてる？いい意味でわからなくなっているという感じです。あと、詩集として詩を集めると、映像の編集というか、モンタージュとかなり近い作り方になるから、言葉とか詩の塊をイメージすればいいんだなっていうのは、ちょっと分かってきたところです。

ヨハン：最初に言ってたキーワードだと思ったんですけど、制作もコ本やも、今言ってることも日常の延長みたいなことが全部繋がっているかなと思いました。

作品を作るためだけに動くのではなく、日常のすべてが作品に繋がっていくみたいなことなんだなって思ってます。でも一時期、日常的に家族で撮影していた素材を作品に入れたりしてた時は、家族が撮られるのを嫌がるようになったりして、作品によって、それまでの日常が変わってしまった時もありました。映像はとくに、カメラを向けることが暴力的なことなので、ものすごくそのことを実感しました。今はもう家族も全然気にしなくなってますが……。日常自体が全部作品の一部になるって、もちろんいいことだけじゃないけど、自分にとってはどうしても切り離せない切実なことです。

ヨハン：自分が何か記録したい気持ちが強くありましたよね。

自分の見たものが消えちゃうことが不思議で、どうして残らないんだろうって思っていました。あと成長していくものが、次の瞬間に変わってしまうこととか、変わってしまった後にそれに気づいた時、何も残っていなかったら自分しかそれを書き留められない。普段から思っていることですが、記録できなかったことにものすごい喪失感を感じます。残したい。残したいけど、残していけないものがある。

野口：これが、エネルギーや原動力になっているのかもですね。

野口：現在、修了生の方にインタビューする課題を行っているのですが、
反対に青柳さんがインタビューをしてみたい方をお聞きしたいです。

全然違う分野の人に話を聞いてみたいのはあります。思いつきで言うんですけど、河原
温の息子（アキト・Y・カワハラ）さんが昆虫学者になってるんですが、話を聞いてみたい。
アートの分野で仕事をしてない人たちにとっては、あまり考えたこともなかったことが、
アートに関わる人にとっては当たり前となっていたりとか。

そういうことって、話をしてみないとわからない。もしインタビューするとしたら、普
段話している共通の話題や、考え方が遠く離れてる人と話したい。

國分：やっぱり昆虫なんですね。

昆虫はずっと興味があります。東日本大震災で原発事故が起こった時に、キノコや貝、植物、虫って、命のリズムが早いから、一番放射性物質の影響が早期に見えやすいっていうニュースがたくさん報道されていました。自分の身体が影響を受けるとしたら、何十年後なんだろうって考えても、わからない。ちょうど同じ時期に、ネットで見て気になっていた虫が、今まさに影響を受けて、幼虫から成虫になって卵を産んで死んでいくのを繰り返してると思ったら、この瞬間に見に行かなきゃいけないんだと考えました。インタビューするのと近い感覚で探しに行きました。ただ、虫は見つけられなくて、インタビューどころじゃないし、そもそも会えない。相手が目の前にいるはずなのに、どこにいるかわからない。

でも、見つけれられないという状況によって、自分と虫の関係性がそこに現れていると思います。

野口：今年度、メディア映像専攻の入試問題の映像課題として、青柳さんの詩である「san kaku no suki ma」をもとに映像を制作する機会がありました。制作時に考えていたことを教えていただきたいです。

中3の時にいった修学旅行での広島で、原爆ドームのすぐ横の宿泊所に3日くらい泊まって、大きいホールで被爆者の方の話を聞きました。被爆したおじいさんのお宅でも、原爆が落ちたその瞬間のお話を伺いました。原爆の構造については、知識としていろいろな方から聞いた話とも繋がる具体的な話なのですが、実際におじいさんの体験した話になるにつれて、すごく抽象的な言葉に変わっていくことが、当時の自分にとってどうしても理解できなかった。

「あの時ガタンってダンスが倒れて“三角の隙間”に入ったんだ」と言う。“三角の隙間”に入るって、何だろうって、帰ってきたあともずっと考えていて、“三角の隙間”に入るって、言い方変だよな”って、担任の先生に言ったら「あの方は自分の経験を自分の言葉で伝えようと思って話してくれてるんだから、そんな感想言っちゃダメ」と言われてしまいました。それからもう二十年近く経ってるけどずっと考えているのが、“三角の隙間”というキーワードでした。

その後、2017年に1週間ぐらい広島を訪れ、“三角の隙間”が何だったのかということを考えながら撮影したのですが、そのとき構想していた作品は完成していなくて、でもあの詩を書きました。

國分：課題文として詩を読んで、頭の中で浮かんだ映像と今お話された時の映像がリンクしてる感覚になって、不思議な気持ちになりました。



一、余震

三角の隙間からずっと出られないままぼくは何日も何十日も何年も引きこもって外のことばかり考えていた。ごろごろと火が燃え盛っていた。ということを知ったのもここに持ち込んだネットブックの7インチの小さすぎる画面の中で、こうしてぼくがいるこの場所の外のまた外のまたまた外の外
の状況がカメラによっていつだって、例えばぼくが死んでしまったその時
でさえ映し出される。画面に映っているのはいつだってぼくかもしれない。
こんなことを考えている自意識過剰なぼくは絶対に画面になんて映らない
かもしれないと思う。どちらかと言うと映らない確率の方が高い。でも1
分後がどうなってるかわからない。映すものがぼくしかなくなってしまっ
ていることだってこの世界の世界の可能性としては存在している。きっと、
画面の中のぼくはぼくであるとぼくは、気づけないだろう。実際気がつかな
かった。小さな画面の中の小さな小さな数センチに満たないぼくに名前を



國分：現在と未来のメディア映像生に何か一言あれば教えてください。



g-1

今が一番暇だなと思って、とにかくいろんなことを
やるのが良いと思います。

國分：青柳さんらしくて納得感がある。

超忙しいのにそう思えるのはすごい。

全然、忙しくないですね。めっちゃ、暇が大事です。



g-2

クレジット



表紙：青柳菜摘《孵化日記》(2011)



a-1: 青柳菜摘《孵化日記 旅行》(2015)



b-2: だつお《ダヴィンチの手法 カフェオレ》(2009)



b-1: だつお《ストリートビューで待ち合わせ》(2012)

c-1: 青柳菜摘 profile photo



d-1: コ本や honkbooks 池袋 店舗風景 (2021) 撮影：畠山直哉



e-1: 青柳菜摘《孵化日記Ⅱ》(2013)



f-2: 青柳葉摘、阿部舜、井上亜美、山内祥太《浜の海坊主》(2014)



f-1: 青柳葉摘「san kaku no suki ma」(2017)



g-1.2: zoom インタビュー中のスクリーンショット



profile 青柳葉摘プロフィール写真

青柳英樹 インタビュー

インタビュアー

國分 莉佐子

あおな

JOHAN CHANG

DAISY GAO